

研養学園在り

RAKUNO GAKUEN



Green Stage

オープンの春をじっと待つ研修館

Vol. 97
2003. 2. 15

聖句

【新講義棟北壁面に刻まれた聖句】

Tribulation produces perseverance; and perseverance, character; and character, hope.
Romans 5:3-4

(わたしたちは知っているのです)、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。
ローマの信徒への手紙 5章3-4節



個性輝く学園に向けて

—教育の原点に立って 改革を進める—

理事長
平尾 和義

● 「志」の再確認

内憂外患の年明けとなり、教育環境にも一層厳しい逆風が吹いています。先の見通せない混沌の時代、長期的ビジョンや未来に鮮やかな夢を描くことのできない時代にあって、「酪農学園」は幸いにもサバイバルをかけたこの大競争時代を前進するため、他の学校にはない明確な理念、コンセプト、ミッションがあります。

学園は今年、創立70周年を迎えています。70年前もまた時代が大きく変わろうとするとき、創立者黒澤酉蔵先生の心に記された熱い思いと情熱、学園第一歩の始まりを忘れることなく、私たちはいま70年前とは質の異なる大変革の時代に身を置くことを改めて認識する必要があります。21世紀の世界が何を望み、それに対して学園は何かできるか、何を期待されているか、自らの心のなかに創立者の熱い思いと志を生かし、その夢、理想を実現するために希望と情熱を持たねばなりません。

● 教育力の向上と 学内一致協力

競争的環境にある現実を視野

に入ると、まず社会に歓迎されるような教育システムを築き、教育力を持たなければ、受験生も集まらずひいては学園自体の存続も危うくなり、またどんな研究、社会貢献を行うかも問われています。しかもそれを抽象的理念ではなく、具体的行動計画によって明確に示すことが求められています。

昨年は、特に教育ソフト面で改革の実質化が進展し、教育の原点に立ち返り、学生生徒、ヒトを育てるという教育の本質を改めて確認しながら、組織的にまた個人的にも様々な活動と努力がみられ成果をあげています。学園全体として高大連携の実質化が一歩進み、制度的に異なる学園内各学校が相互理解の下に一貫教育の芽が将来に向けて確実に育ちつつあります。また大学学部によってはFDの開発研究をはじめ、授業改善の様々な試みと教育力の向上に真摯な努力が続けられています。これらの活動を通じさらに重要なことは学内の力を合わせた一致協力であり、将来を見通す洞察力と実行力を持った有為な人材が多く、職域、職位、立場の別を超えた活動がみられることです。

● 教育改革の さらなる推進を

そして、このような授業改善の技術、優れた個人的能力は日常的な仕事を通じ、学園の目的達成に向けて全体的な教育力の向上、あるいは業務達成能力にしなければならないと強く考えています。学園に現在ある私たちが目的意識を持ち、意欲と希望を持って仕事に取り組む仕組みをどうつくるかは大きな課題で、これがなければその被害を受けるのは学生生徒とその保護者であり、学園全体の教育力、教育サービスの内容如何によって本学の評価も自ずと定まらるであろうと思います。

現在の教育計画は今年で終わりますが、様々な面で多くの課題が山積みするなか、これまで右肩上がりの時代には先送りできた課題もいまや待ったなしの状況にあります。現状を認識し、これまでの内容を検証しながら個別事象と全体、ミクロ的教育改善、マクロ的教育改革各般にわたって、学園全体のさらなる発展を図るために全学の英知と力を集め、新たな次期教育計画の立案が急がれます。

キャンパスレポート

秋のキリスト教教育 強調週間 犬養道子氏ら講演

酪農学園大学・短大「秋のキリスト教教育強調週間」特別講演会が10月29日～31日の3日間、黒澤記念講堂において『あなたには世界をよくする力と使命がある』という 주제로、3人の女性講師を招いて行われました。

1日目は、前・アジア学院コーディネーター、現・日本基督教団西那須野教会牧師の朴 美愛（パク・ミエ）氏による『和解のために仕える人びと』、2日目は犬養道子氏による『南部アフリカで考えた酪農—あなたを待つ世界』、3日目はドイツから学生伝道のために派遣された宣教師のカリン・ストルジンガー氏による『あなたの若い日に、あなたの創造主を覚えよ』という演題でそれぞれ講演を行い、数多くの方が参加しました。特に2日目の犬養氏の講演は「ライラックの会」との共催で、一般市民向け公開講演のため、約600人収容の講堂は大勢の参加者で埋め尽くされました。

犬養氏は、以前からサラエボの孤児のために日本に援助を呼びかけ続け、また、自身の著書による印税を主とした「犬養基金」で旧ユーゴ難民に奨学金を送り続けるなど、世界の難民・



飢餓問題に深く関わり、活躍されています。

講演会ではまず、日本の海外援助が他国と比べ遅れていることを指摘した後、犬養氏が環境改善や植樹に取り組み始めるきっかけとなったアフガニスタンとパキスタンの難民について語りました。

その後犬養氏はテーマのアフリカに話を移し、「素人の私が見てもその土の悪さはよくわかります。あの国にはここで学ぶあなた方の知識を必要としている人がいるんです」と机をたたきながら力強く述べ、「けれども知識を一つの実学に生かすときの方法として英語が必要。技術や知識を持っていても言葉がない。日本人の弱いところですね」と専門知識だけでなく、英語教育の重要性も訴えました。

最後に犬養氏は「酪農学園大学なんて聞いたこともない人たちが、「酪農」というのは大学までできるサブジェクトだと知るだけでも、あなた方があの国へ行く価値がある」と述べ、アフリカの厳しい現状を切実に語る犬養氏の話に、参加者は真剣なまなざしで聞き入っていました。



『アレクセイと泉』 監督 本橋成一氏の 講演会開催

環境システム学部地域環境学科主催の特別講演会が12月3日、黒澤記念講堂において写真家の本橋成一氏を招き、「ひとつのいのちはすべてのいのちにつながっている」という演題で開催されました。

講演会ではまず、本橋氏が監督の映画『アレクセイと泉』が上映されました。この映画は、1986年に爆発事故を起こしたチェルノブイリ原発の近くにあるブジシチェ村を舞台に、事故後も放射能が検出されない不思議な泉と、そこで暮らす人々のたくましさや温かさを映像化したドキュメンタリーで、音楽は坂本龍一氏が提供しています。2002年ベルリン国際映画祭ベルリナー新聞賞・国際シネクラブ賞を受賞し、文部科学省選定、日本PTA全国協議会・優秀映画鑑賞会推薦の映画です。

映画の上映後、本橋監督は演壇に立ち、撮影中の出来事や村で唯一の青年であるアレクセイの心の温かさについて語りました。「この村に来るとみんなに見てほしいものを撮りたくなるんだよね」と話す本橋監督からは笑顔がこぼれます。

講演会の終盤、学生からの

「なぜこの泉からは放射能が検出されないのか」という質問に本橋監督は「村の人は『この水は100年前の水だからさ』と言います。しかし何十年後も変わらず水がきれいなままなのかわからない。ぼくらは過去の遺産を食いつぶしているんですね」と答え、その言葉には環境汚染など多くの問題を抱える未来を担う学生たちへのメッセージが込められているようでした。

講演会に参加した地域環境学科2年の齋藤彩香さんは「まだわからないことは多いけれどその中の一つでも知ることができた。同じ時間でもお互いの生活が全く違うのが不思議」と語り、同学科1年の武藤美佳さんは「物を大切にしたり自給自足の生活は大事だし、あこがれもする」と述べ、学生たちには文化の違いを感じ、考える良い機会となりました。

講演後、本橋監督は学生からのサインに応じ、監督の温かな人柄を見て取ることができました。



学園トピックス



大学・大学院 短期大学部

短大特別講演会を開催



酪農学園大学短期大学部の特別講演会が10月7日、講師に稔子・T・ウィルソン氏を招き、「アメリカの家庭における食事のあり様と食産業」という演題で行われました。参加者は主に「暮らしのサイエンス」、「農村生活科学」を受講する学生です。

ウィルソン氏は世界各国の家

庭料理・サービスについて専門的に調査・研究を行っており、アメリカにおいて高い評価を受けています。また、道内においては日米各都市の姉妹提携のコーディネーターとしても活躍されています。

講演ではまず、アメリカの食生活の実態や女性の社会進出によって調理・食事にかかる時間が減少してきたことなどについて述べられ、食産業における「ミールソリューション(食事解決法)」という戦略の重要性を訴えました。その中でウィルソン氏は「ミールソリューションをしっかりと念頭に入れて、地域社会貢献のため、その地域の食材を生かせる食産業に進出してほしい」と笑顔で学生たちに呼びかけました。

短大・酪農学科の筒井静子講

師は「どの分野においても、学生にとって第一線で活躍されている方のお話を直接聞くことは意義のあることです。食産業の戦略としてのミールソリューション化は、日本では首都圏を中心に展開されているところがありますが、今後はますます注目度を増すでしょう」と話していました。

酪農学部にて FD研修会を開催

酪農学部では、昨年度に引き続き、授業の改善を目指したFD研修会を12月19日に実施しました。今回の研修会は、各学科から推薦いただいた先生方(大学酪農学科:小澤修二助教授、農業経済学科:吉野宣彦助教授、食品科学科:眞船直樹教授、食品流通学科:深澤史樹講師、短大酪農学

科:寺脇良悟教授)からの特色ある授業への取り組みについての発表ならびに質疑討論という形で進められました。

授業アンケートの結果を詳細に分析して授業改善に役立てる真摯な取り組みを初めとして、ビジュアルなメディアの活用、学生参加型の授業、フィールドを活用した授業展開など、発表されたいずれの先生も、黒板を使った板書というこれまでの伝統的な大学での授業スタイルから脱却した新しい授業への取り組みを紹介されました。参加された先生方からも活発な質疑討論があり、盛会裡に終了しました。



とわの森 三愛高等学校

男子バレーボール部

「春の高校バレー」(全国選抜優勝大会)出場目指して、高校生を指導する企画(コーチングキャラバン)に、今年度とわの森三愛男子バレーボール部が選出されました。

現在、元全日本代表で現在日本鋼管勤務の「花輪晴彦さん」に指導していただいております。昨年8月から2回のペースで、今年2月の全道大会まで練習を見ていただきます。

昨年8月の国体予選、11月の札幌支部新人戦とも敗退し、今とても厳しい



状況ですが、生徒は2月の全道大会に向けて燃えています。

さて花輪さんの練習ですが、優しい口調に反して内容は厳しく、気の抜けたプレーには容赦なくボールが飛んできます。しかし、理論づけられた練習に生徒は引き付けられ、必死についていくようになりました。いろいろな指導をしていただき、少しずつして確かに強くなってきています。2月15日からの全道大会では頑張ります。

この指導の様子は2月26日(水)UHB16:00~放送予定です。

PTA研修部の取組み

例年PTA研修部の取組みは、本校の教育方針や教育実践の一端であること、本校の教育施設およびスタッフの活用と紹介、本校PTA交流と研修、地域市民との交流や連帯などを目的として、年度により講演会・音楽会を主催

してきました。

今年度計画は、11月18日PTA会員を中心に「楽しい講座」を実施しました。この取組みの特徴は、PTA会員の活動がややもすると講演会・学習会、聞く・観るといった、受動的活動が多くなる傾向にあり、PTA会員の主体的・能動的取組みを重視し、活動の活性化を考慮したことです。取組み内容は、全員にアンケートをとった結果「やさしいパソコン」「毛筆による色紙作り」「ソーセージ作り」を各希望者ごとに分かれ、体験を通じ交流と研修をしました。大変好評であり来年以降の継続発展が望まれます。

11月18日には、本校の建学の精神を知る一つとして「親分はイエス様」の映画会を地域市民と共に鑑賞しました。

12月10日には、例年好評をいただいている音楽会を「とわの森クリスマスコンサート」として、今年度は札幌コンサートホール専

属オルガニストのモニカ・メルツォーブアさんと箏(こと)演奏家の泉山章子さんによる洋楽、和楽の組み合わせによる新しい演奏会を企画し、多くの市民、保護者と共に楽しみました。この企画は本校のPTA会員はもちろんのこと、多くの市民にも親しまれ、今回は400名の鑑賞者がありました。



酪農学園の新しい取り組み(地域環境学科)

循環型社会の諸問題

地域環境学科 押谷 一 助教授

酪農学園の創設者、黒澤酉蔵先生は「循環農法図」によって自然と人間活動の間の循環の仕組みを示しています。現代の資源消費は非常に大きく、排出される廃棄物は自然のなかの浄化能

力を超えています。そのため、人為的な資源循環の仕組みを社会全体に適用することが必要です。大量生産、大量消費、大量廃棄の社会システムのなかでリサイクルは経済性がなく、技術的な問

題にも限界があります。

日常生活から排出される廃棄物は多様な種類が含まれているため、種類ごとに「分別」することは消費者の当然の役割ですし、廃棄物(再生可能資源)を効率よく収集(回収)、運搬する事業が経済的に成立するような仕組みも必要です。

リサイクルのあり方は、その国・地域の経済に左右されるため、途上国の貧困などとも関係があります。

社会システムを循環型に転換するためには多様な視点、幅広い視野をもち、何をすべきなのか、一人ひとりが考え、行動することが求められています。

インタビュー ゼミで得たもの フィリピンスタディツアー



◆まずフィリピンの印象を聞かせてください。

一車がとても多くてひどい渋滞でした。路上では子供たちが果物などを売っていて、生活していくのに必死なんです。でも、少し離れた所には立派なビルや家が建っていて、貧富の差がとても激しい国でした。

◆パヤタスというゴミ処分場を訪れたそうです。

一ゴミの山が5、6個あり、そこでゴミを拾って生活している人を見て、普通に暮らしている自分たちがとてもぜいたくに思えました。でも、彼らにしてみればそれ

が普通だから表情も明るいし、みんな前向きで。それが切ないんですね。ビデオで見た時はどこか他人事だったけれど、実際に自分の目で見て、とても強い衝撃を受けました。

◆小学校も訪れたそうですね？

一小学校といってもどれほどのレベルでやっているのか。それに学校にも行けない子供が大勢いるんです。自分たちは義務教育や、望めば大学まで行けるのに、同じ地球上にこんな差があっているのかと思います。

◆私たちにできることは？

一彼らにとって貧しいことが不幸なのかどうかわかりません。お金や物資を送るのだけが本当に良いことなのでしょうか。まずは、みなさんに今のフィリピンの状況を知ってほしいですね。「こ



んな国があるんだ」という意識を持つことから始めるのが大事だと思います。

ゴミ分別回収「分別FIVE」



◆なぜ学内で分別回収が必要なのですか？

一今はリサイクルに関する法律もできて、資源の重要性が明らかです。身近な大学でも分別回収することで、ゴミの減量化につながれば、と思いました。

◆具体的にはどんな活動をしてきたのですか？

一まず、6つの研究室に依頼し一週間のゴミの量や質を調べ、そのデータをもとに学長に提案しました。学内での分別の必要性を説明するのは難しかったけれど、賛成していただいた時はとてもうれしかったです。

◆現状はどうですか？

一今年度から始まって7月に追跡調査をしましたが、まだまだ。ゴミ箱にわかりやすく絵を描いたり、説明文を詳しくしたりと分別に対する意識を高めようとしたのですが、それが一番難しいですね。

◆今後の課題は？

一分別ボックスを置いたことは第一歩なんです。学生の意識が変わらないと何の意味もありません。これからは大学のシステムとしてそれが当たり前になってほしいですね。その道筋作りを後輩に託したいと思います。

◆何かメッセージがありましたら。

一ゴミを分別する前にゴミを減らす努力をしてほしいです。ゼロにはならないけれど、減らすことはできるはず。人任せではなく「自分から」という気持ちを持ってほしいと思います。



行動・言動には気をつけています。

将来的に、廃棄物というのは次々に新しい問題が出てくるので、それに一つ一つチャレンジして問題を消化し、会社に貢献していきたいです。常に志を高く持ち、知識と技術と人間関係を大事にしてさらに勉強していきたいと思っています。

後輩の皆さん。大学で学んでいることをいい機会だと思って、一

つ一つ身近なところから活動していきましょう。社会に出ればそれを応用する時間もあるし、学生とは違う視点で物事を見たり考えたりするチャンスがたくさんあります。それを楽しみしながら、勉強に励んでください。



地域環境学科第一期卒業生

佐藤 恒平 さん

北清企業株式会社 業務部 勤務

清掃事務所で働く親せきから話を聞いたり、清掃業のアルバイトをするうちに廃棄物に強い関心を持ち、北清企業に就職しました。主な業務は、事業系廃棄物、産業廃棄物、建設廃材の収集・運搬で、今はいろいろなことを経験させていただいています。

この業界に入ってみて、いかに自分の考えが浅はかだったかわかりました。収集する側になると廃棄物に対する視点も変わり、専門的な知識が身につけてきました。もし今、在学中の時と同じテーマで論文を書いたら、全く違う内容になるのではないのでしょうか。

学生のころとの違いは、やはり人間関係です。会社ではすべての人が先輩ですから、それを忘れず、

活躍する同窓生 Vol.5

21世紀の地球と農業畜産業の融合できる会社を

株式会社 ピエトログルト 取締役

告田 政 秋 さん

酪農学科第23期生
1985(昭和60)年度卒業

◆まず、「株式会社ピエトログルト」について教えてください。

「1999年に妻の幸子（旧姓・山口・酪23期生）と共に『有限会社エービーシーヨーグルト』という会社を設立し、以前妻が乳製品メーカーに勤務し、ヨーグルトの研究に従事していたことも幸いして、主にナチュラルヨーグルトやノンファットヨーグルトなどの乳製品の商品開発・製造を行っていました。そして2002年8月には、自己資本率の改善と資金の調達、販売網の強化と安定を考え、ドレッシングなどで知られる『株式会社ピエトロ』の子会社となって『株式会社ピエトログルト』を設立し、その後も従来のエービーシーヨーグルトと同様、＜生乳＋低温殺菌＋乳酸菌＞を基本としたはっ酵乳の研究開発・製造を私の元で継続しています」



◆ピエトログルトとはどういうヨーグルトですか。

「妻の作るヨーグルト『ピエトログルト』は原料を生乳のみとしています。これには契約酪農家から直接いただいているその日の搾りたてを使用しています。その生乳の栄養素を生かすため70度で30分間、低温殺菌し、それに合う厳選した乳酸菌を加え、37度の低温でゆっくり発酵させて固めます。ですから、寒天やゼラチンなどの添加物は一切使用していません。また、このヨーグルトに含まれる乳酸菌数は1グラム中16億個にもなるのです。これは厚生労働

省規定のヨーグルトの160倍にあたり、“低温でじっくり発酵させる”という独自の製法により爆発的に増えた乳酸菌です。

しかし、この製法だと時間がかかるため、1日に600本が限界なのです。また、上質の原料を使用しているのですが、大量生産だと添加物を加えるなどのウソが生じてしまうでしょう。そこに私たちのこだわりがあるのです」



◆会社を設立した動機と特徴について教えてください。

「私と妻は大学を卒業してしばらくブラジルで暮らしていたのですが、妻はそこでその土地が生んだ食べ物の力に感銘を受け、私もそこで多くのことを学び、経験しました。日本に戻った時、“この国は、土地はあるけれど、世界の中で非常に恵まれているという現実と、産業として大きな力を持っていることを理解していない”と感じました。

それでこのブラジルでの感動を原点として、『つげた農園』を始めました。畑を耕し、家畜を飼い、豊かな実りを味わうたびに、“子供たちにも安心して食べさせられる食品を提供したい”という思いが生まれ、会社を設立しました。その第一歩がヨーグルトだったので。

現在、私たちが製造しているのは“えびの高原ヨーグルト『フローラ』”や、“告田幸子のヨーグルト”などがありますが、通信販売やスーパーとの直接取引による価格競争に巻き込まれない、生産直売に近い、消費者の顔が見える販売体制をとっています。問屋への卸はしないで、クローズマーケットとして商品の付加価値を維持することが目的です。

そして、低脂肪ヨーグルトですが、遠心分離機を使用して、生乳からほとんどの乳脂肪分を分離させ、得られた乳脂肪分が重量の0.1%以下の脱脂乳を用いることで、生乳を高温処理することなく低脂肪ヨーグルトを作ること成功し、特許を取得しました。

将来的には現在の会社をさらに発展させ、21世紀の地球と農業畜産業の融合できる会社を模索していきたいと思っています」

◆では最後に、在学生や卒業生にメッセージを。

「私たち夫婦は、大学や企業で食品に関する基礎研究を重ねてきました。その必死に研究して得た知識と技術が今の私たちの肥やしとなっています。—この国は恵まれている、この土地は大いなる力を秘めている—そのことを理解し、認識し、知恵という個人の汗を吹き込むことができれば産業を創り出す事ができるのです」

P R O F I L E

【プロフィール】
株式会社ピエトログルト

取締役 告田政秋さん
昭和38年11月22日生まれ、宮崎県えびの市出身。宮崎県立高原畜産高校を57年3月に卒業後、同年4月に酪農学園大学酪農学科に入学、61年に卒業。その後ブラジル・アルカンジョに農業移住。平成元年にベレン市に移り、日本料理風と牛肉のステーキを主としたレストラン「出雲」、輸送業「Naiks」を経営。その翌年に幸子さんと結婚し共にブラジルで過ごす。平成4年に日本に帰国。えびの市にて食肉製造業、食肉処理業ならびに総菜業の営業許可を取得し平成11年に(有)エービーシーヨーグルトを設立。平成14年から現職。39歳。

【プロフィール】
株式会社ピエトログルト

告田幸子さん
昭和37年4月21日生まれ、大阪府堺市出身。大阪農芸高校を56年に卒業し同年サントリー(株)に就職、道明寺プラントに勤務する。その翌年に進学のために退社し酪農学園大学酪農学科に入学。61年3月に卒業。その後、関西ルナ(株)研究開発室に勤務し乳酸菌などの研究やデザートの開発に取り組む。平成2年に結婚退社し、ブラジル・ベレン市へ。平成11年に夫と共に(有)エービーシーヨーグルトを設立した後、「低脂肪ヨーグルトの製造方法」で特許を取得するなど、現在も意欲的に各分野の研究開発を行っている。40歳。



同窓会だより

◆◆ 大学・短大教職員
同窓生の現地研修会 ◆◆

大学酪農学科および短期大学部同窓生教職員による、現地研修会が8月28～29日、十勝新得町を中心に、試験場、管内酪農家同窓生との技術の交換研修を行うなど有意義に全日程の研修を終了することができました。



◆◆ 埼玉県支部同窓会 ◆◆

同支部の親睦キャンプが9月14～15日の両日、県北部の神流川添いの神泉村エンペラロッジにて隣接の千葉、群馬支部からも参加し総勢21家族35名が集まり、バーベキューと手打ちうどんを囲んでの団欒、夜は花火と夜更けも忘れるほどの催しの中で、学園の思い出を中心に歓談を行い、楽しく意義のある交換交流が行われました。

◆◆ 札幌市役所在職
同窓会(酪楽の会) ◆◆

同窓会名を「酪楽の会」と名付けられ、市役所在職の同窓生による同窓会活動が、これまで計画的に行われており、今年も7月26日札幌市で開催されました。今後一層活発な活動と交流が図られることを期待致します。

◆◆ 短大9期卒
同窓会 ◆◆

9月15日に新札幌アーキシティホテルにおいて開催しまし

た。初めに遊佐孝五先生よりあいさつをいただき、出席の先生方も学生当時の恩師とあって、交流の中では卒業以来の懐かしい出会いと、当時をしのぶ機会ともなり、有意義な同期の交わりができました。

◆◆ 近畿支部同窓会 ◆◆

同支部における今年度の生涯教育講座は、本学の鮫島邦彦教授による「最近の食料事情と食品を巡る問題について」をテーマに学習会を行いました。最近の食品の問題が取りざたされていることから、今回、食の問題を取り上げ学習会を行い有意義でした。

◆◆ 熊本県支部同窓会 ◆◆

同支部は11月8日、熊本市において同窓会連合会高橋節郎会長を招き学習交流会を開催致しました。会長より学園の現況等について講演を行った後、同窓生の親睦と融和および本学との交流を図ることなど、会員と忌憚のない意見交流が行われました。

◆◆ 札幌支部主催の
石狩地区全体同窓会 ◆◆

石狩地区全体の同窓会が11月15日、札幌市において開催致しました。学園関係より酪農学園理事長はじめ関係理事の方々および後援会より会長、常務理事が来賓として、また、学部長、学科長をも招き交流懇談を開催致しました。懇親会に先立ち支部長のあいさつ、平尾和義理事長の来賓あいさつ、続いて高橋会長の祝杯をいただき、さらに、交流の中で両学長、高校校長、大学

同窓会長等のテーブルスピーチをいただくなど、終始盛会裡に終了することができました。



◆◆ 福島県支部同窓会 ◆◆

同支部の総会が12月1日、郡山市で開催されました。この度は、通常総会として特に今後の事業運営を重点に、規約の改訂および事業等が審議されました。終了後は最近の話題から「プロバイオティクス乳酸菌」について講演と学習会を行いました。

◆◆ 酪農学科・獣医
学科・支部同窓会 ◆◆

酪農学科・酪進会「家畜管理、行動学ゼミ」同窓会の総会と学習会が干場信司教授、森田茂助教授の指導のもと11月3日に開催されました。獣医学科同窓会は6期卒30周年記念同窓会が9月14日の開催をはじめ、支部同

窓会では岐阜県支部が9月20日に菊池直哉教授が出席し岐阜市で開催。釧路、帯広支部は11期卒同期会が11月26日に竹花一成教授が出席し帯広市で開催。埼玉県支部は10月25日及川伸助教授が出席し熊谷市で開催。石川県支部は12月7日に金沢市で小谷忠生教授が出席し開催するなど、支部同窓会が行われました。

◆◆ 酪農学園根室同窓会 ◆◆

同同窓会は1月18日、中標津において総会を開催しました。総会に先立っての研修会では獣医学科谷山弘行助教授による牛のBSEについての解説があり、わが国における6頭目の発生が報じられた日でもあり、40数名の同窓生は真剣に聞き入っていました。来賓として高橋会長、とわの森三愛高校の山谷繁男先生が出席し、特別会員の北村直人代議士も時間を割いて出席され、国の農政問題について話題を提供していただきました。終了後は懇談会に移行しました。



◆◆ これから開催される同窓会とお願いについて ◆◆

◎とわの森三愛高校(旧三愛女子高校)
20期卒同窓会の開催について

開催期日は2003年6月14日(土)に予定致しております。詳細については後日往復はがきにてご案内申し上げます。多くの方の出席をお待ち致しております。

◎とわの森三愛高校同窓会からのお知らせ

- 総会・懇親会等の同窓会活動として何か企画、要望等がありましたら、同窓会事務局(386-3111)までご連絡ください。
- 同窓会会報「奏愛」の紙面で取り上げて欲しい内容および、前回号までの感想等をぜひお寄せください。

お知らせとお願い

- *同窓会連合会のホームページを同窓会の活動にご活用ください。
HPアドレス:<http://www.rakuno.ac.jp/dosokai/iriguchi.htm>
- *住所を変更された同窓生の方は、下記のいずれかの方法で同窓会事務局までご連絡ください。
TEL 011-386-1196 / *FAX 011-386-5987 / *手紙またはハガキ
Eメール rg-dosok@rakuno.ac.jp
〒069-8501 江別市文京台緑町582・酪農学園同窓会連合会事務局

酪農育英会だより

◆◆ 奨学金の返還についてのお願い ◆◆

酪農育英会は1958年の設立より45年目を迎え、今年度は大学院、大学、高校を合わせて43名の学生、生徒に対し貸与を行っております。

この奨学事業は先輩からの返還金が直ちに後輩への奨学金として貸与されていく仕組みになっておりますので、返還が滞ると事業の円滑な運営に大きな支障を来すことになります。また、ここ数年の金融情勢の悪化に伴い、当育英会の運営もますます厳しいものとなっております。

卒業された貸与者の皆様へは毎年、各自の返還時期（6月または12月）に合わせて事前に返還実績額、当年度の返還額等をお知らせし振込用紙を送付致しておりますので期日までのご返金をよろしくお願い申し上げます。

なお、住所、氏名などの変更および返還期日、支払い方法などのご相談がございましたら、お気軽に本会事務局まで、ご連絡、お問い合わせ下さいますようお願い申し上げます。

財団法人 酪農育英会事務局
〒069-8501
江別市文京台緑町582番地
TEL 011-386-1211

酪農学園貴農同志会からのお知らせ

1. 貴農同志会10周年記念事業協力金のお願い

来年度の貴農同志会10周年記念事業のため、会員各位に協力基金のご協力をお願いしております。10千円でお受けしておりますのでご協力いただける方は、下記へお振込みをお願い申し上げます。

送金先
振込銀行 北洋銀行 江別中央支店
普通預金口座 3091397
郵便局 口座番号 02700-6-48249
銀行並びに郵便局とも同一口座名
貴農同志会 会長 原田 勇

2. 「10周年記念誌」掲載の寄稿お願い

「記念誌」の発行にあたり会員の皆様へ、学園在職中の思い出、エピソード、学園に期待する事など、下記の通り原稿を募集しております。

- 1) 字数：1600字以内
(写真があれば添付)
- 2) 締切日：平成15年3月31日
- 3) 標題、署名、最終所属部署および投稿月を明記
- 4) 発行予定日：10月1日
(会員の皆様に発送予定)
- 5) 原稿発送先宛名：〒069-8501
江別市文京台緑町582番地
酪農学園 貴農同志会
10周年記念編集室 宛

酪農学園大学
キャンパス写真集
「from R」を頒布

酪農学園大学入試部入試課はこのほど、昨年発行の「from G」に続く写真集「from R」を発行し希望者に無料頒布致します。

スポットニュース

◆◆ 研修館完成、来年度から使用開始 ◆◆



昨年9月より建設が進められていた研修館が12月26日に完成しました。主に高校生の総合学習の対応施設として見学・研修の場に使われます。

この建物は鉄骨2階建てで、建築面積が220.42㎡、延床面積が409.58㎡。内装には学園所有地である渡島福島植林地の杉を使用しており、経費は約1億円です。また、建物の隣には江別市の都市景観賞を受けた精農寮があるため、景観を損なわぬように寮とのバランスを考え、外壁にはれんがや木材を多く使用しています。

大谷俊昭大学学長は「学園の建物では数少ない、外観の雰囲気重視したもの。今後の学園

の財産になるだろう」と話していました。

◆◆ 学園PR、さらに強力に ◆◆

さまざまな分野へ発信している酪農学園のPRが、昨秋からのラジオ放送や写真集によってさらに強力になりました。

10月～12月にかけて放送されたラジオ番組「らくのうがくえん NOW in Session」(FM北海道)では、プレゼンターの北川久仁子さんの楽しいトークにのせて、身近な科学をテーマに本学の授業や研究の中から一つずつ紹介し、好評を呼びました。

また、9月から本学のホームページにオープンした写真集「Green Field」では、学内の風景や動物たちを季節ごとに掲載していきます。

これをきっかけに、今まで以上に大勢の方が大学を訪れてくださることを願っております。



希望者はハガキに住所、氏名、電話番号および「from Rを希望」と明記の上、下記までお申し込みください。

〒069-8501
江別市文京台緑町582番地
酪農学園大学入試部入試課
「from R」係

※from Rの「R」は
●本学のテーマである
再生・復興「Rebirth」
●信じること
「Religion」
●受け継ぐこと
「Relation」
●実現すること
「Realization」
以上のような意味合いが込められています。



編集後記

★昨年夏から秋にかけての2～3ヶ月の間に、主に江別市内の中学校から総合学習の受け入れの依頼が多くありました。広報室で把握しているだけでも15件ほどです。少人数のグループに分かれて興味のある仕事や自分たちが住んでいる地域について調べるといふもので、本学を訪れる中学生のほ

とんどは「獣医」について調べたいようです。どの生徒にも共通して言えることは、こちらが思うよりもはるかに真剣に取り組んでいることです。自分の将来をしっかりと見据えようとしている彼らを目の当たりにして、「酪農学園」を確実に伝える学園だよりを作る必要性を感じました。(O)

酪農学園だより

RAKUNO GAKUEN Vol. 97
発行：学校法人酪農学園 2003. 2. 15

酪農学園大学/大学院/酪農学園大学短期大学部
とわの森三愛高等学校
編集：学園広報室
〒069-8501北海道江別市文京台緑町582
TEL (011) 388-4158 FAX (011) 388-4157
HPアドレス：http://www.rakuno.ac.jp/
E-mail: koho@rakuno.ac.jp